

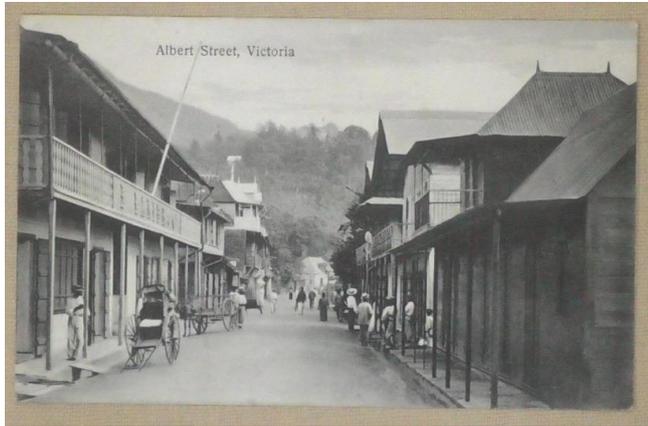
令和元年度 ACTR

分類 番号	A18	取組 名称	19 世紀末～20 世紀初頭の 아프리카・セーシェル諸島における宮津出身写真師の活動及び作品調査とその成果公開
研究代表者所属・職名：		生命環境科学研究科・准教授	氏名： 松田 法子
研究担当者： 京都府立大学（松田法子） 外部分担者・協力者（河森一浩、山口孝幸、青木澄夫ほか）			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名） 京都府宮津市、宮津商工会議所			
【研究活動の要約】			
<p>アフリカに定住した初期の日本人である写真技師・大橋申廣が宮津の出身者であったことが近年明らかにされた（青木澄夫、2014 年 2 月京都新聞）。地元宮津でこのことはほぼ全く知られていない。</p> <p>大橋の存在は、日本とアフリカの国際交流史や文化交流史、また近代における日本人の海外進出や移民史、加えて明治期の京都府下における民衆の国際活動の足跡を物語る重要事例として位置づけられる。京都府が取り組む「海の京都」のコンセプトにも深く関わる近代の国際的具體例である。</p> <p>以上より当研究では、アフリカ大陸南東の沖合にあるセーシェル諸島に辿り着き、現地で草創期の写真師となった大橋の足跡を追って、セーシェル現地調査を行った。その他、セーシエルの写真絵はがき史を把握するため、大橋の作品を含む 20 世紀初頭～前期の状況を調査し、また関連文献等の収集や翻訳を行った。</p>			
【研究活動の成果】			
<p>セーシェル共和国マヘ島ヴィクトリアなどでの現地調査により、大橋が残した写真絵はがき群は、当時のセーシエルの建築や町並みを伝える視覚資料として非常に重要であることが確認された。加えて大橋の写真絵はがきには、アフリカ大陸から流刑となった王の肖像なども含まれ、近代アフリカ史の一断面をも伝える貴重な画像群であり、「植民地内部からの歴史学」が必要とされている世界的状況からも重要な史料であると確認できた。</p> <p>大橋が制作したセーシエルの建築や町並みが写る絵はがきについては、かなりの割合でその現在地を特定できた。絵はがきと同じ構図により、現地で写真と映像による記録を行った。</p> <p>また大橋はセーシェル最初の写真師ないし写真絵はがき製作者だと伝えられており、セーシェルに関する 20 世紀初頭～前期の写真絵はがきについて調査を行ったが、確かに同時期の絵はがき製作者はかなり限られていたと考えられる。これについて継続的に調査を行う。</p> <p>セーシェル最初の定住者は 1770 年に黒人及びインド系奴隷を伴って入植したフランス人であるとされ、2020 年は同国の「建国 250 年」にあたる。当初から海を通じた移民の国として始まった当地の歴史を引き続き調査し、宮津・天橋立周辺の歴史との、海を介した豊かな空間史的研究の構想を得た。</p>			
【研究成果の還元】			
<ul style="list-style-type: none"> ・2020 年度の調査結果を統合し、2020 年度中に宮津市内等でシンポジウムを開催する計画とする。（参考） ・松田法子「宮津新浜、茶屋町の記憶」、『京都外科医報』、京都外科医会、pp.53-63、2020.1 ・松田法子「新浜における茶屋町の形成と文化」、『宮津天橋立の文化的景観』文化的景観調査報告書 [宮津地区・補遺編]、宮津市（2020 年度刊行予定） 			
【お問い合わせ先】 生命環境科学研究科 松田研究室 准教授 松田 法子 Tel: 075-703-5390 E-mail: kirpinfo@kpu.ac.jp			

参考 (イメージ図、活動写真等)



大橋申廣が製作した写真絵はがきとセーシェル現況の比較例 (クロックタワー)



大橋申廣が製作した写真絵はがきとセーシェル現況の比較例 (ヴィクトリアの街並み)

※ 以上、大橋申廣の写真絵はがき画像は青木澄夫氏の提供による